



立春は過ぎましたが、まだまだ寒い日が続きます。風邪を引きやすい季節で、受診・投薬の機会も多いかと思います。そこで、今回は、「くすり」についてのお話しです。

薬について

抗生物質（抗菌薬）の乱用で、耐性菌の問題が取り上げられています。耐性菌ができてしまうと、本当に抗生物質が必要なときに効かなくなり、命にかかわることもあります。

必要な薬を必要な期間、適切に服用することが大切です。たとえば溶連菌感染症になった場合は、抗菌薬を5日間～10日間は服用しなければなりません。リウマチ熱や急性糸球体腎炎を合併したりすることがありますので、医師がよいというまで服用を続けます。

その反対に、ウイルスに抗菌薬は効きません。合併症予防のために処方される場合もありますが、ほとんどのウイルス性の病気には抗菌薬は処方されません。

自己判断で薬を飲ませた後に受診した場合、診断のさまたげになる場合もありますので、事前に服用したことは医師に伝えましょう。

症状が同じだからと、他の子どもに出された薬を飲ませるのはやめましょう。特に子どもの場合、体重で量が決められていることが多いので注意が必要です。また大人の薬を子どもに飲ませるのも危険です。子どもは大人を小さくしたものではありません。体の器官は未発達なのです。

人間の体には自然治癒力があります。薬は、あくまで体力回復のための補助という意識のもと、まずは**休養と栄養**が大切であることを頭においておきましょう。

